

子どものスポーツに対する好悪と 親子のスポーツ行動との関連： 笹川スポーツ財団スポーツライフに関する 調査を用いた横断研究

田中 博史 (大東文化大学スポーツ・健康科学部)

只隈 伸也 (大東文化大学スポーツ・健康科学部)

横矢 勇一 (大東文化大学スポーツ・健康科学部)

勝俣 康之 (大東文化大学スポーツ・健康科学部)

工藤 保子 (大東文化大学スポーツ・健康科学部)

The relationship between children's likes and dislikes of sports and parent-child sports behavior: Cross-sectional study using a survey on sports life of Sasagawa Sports Foundation

Hiroshi TANAKA

Shinya TADAKUMA

Yuichi YOKOYA

Yasuyuki KATSUMATA

Yasuko KUDO

【はじめに】

我が国では、近年の急激な生活様式や食生活の変化から子どもの肥満が増え、生活習慣病を罹患する子どもが増加している。子どもの肥満の理由の一つとして、運動・スポーツの不足によることがあげられている。スポーツ庁による「令和元年度全国体力・運動能力、運動習慣等の調査結果」¹⁾においても、子どもの授業以外の運動時間の減少が報告されており、子どもの健康管理上、運動習慣を身につけさせることは課題である。

子どもの身体活動・スポーツ習慣確立においては親の影響が一因であることが報告されており²⁾、身体的にアクティブな親の子は、身体的にアクティブであることが示されている³⁾。また、佐々木

ら⁴⁾は、スポーツは親と子どもの接触の機会を増やし、親子関係の強化に貢献すると報告しており、久崎ら⁵⁾は、大人のスポーツに対する肯定的な行動的・認知的側面、またそれを通じて生み出される雰囲気は、子どものスポーツに対する肯定的な価値、有能感、楽しさを生み出し、ひいてはそれらが内発的動機づけの源泉となりスポーツの参加や継続を促すという影響過程が存在することを示唆している。さらに、塩野谷ら⁶⁾は、親の運動に対する自己効力感が高いこと、親自身の身体活動好意度が高いこと、親が子どもの身体活動を重要だと認識していることが、子どもの身体活動推進に影響する親の態度であることを報告しており、馬場ら⁷⁾は、保護者自身が運動に対して好意的な感情を持っていると、子どもに運動・スポーツをするように促す傾向があると報告している。これらの先行研究より、子どもがスポーツに対してどのような感情を持つのかは、親の行動の影響が大きいことがわかる。親の運動嗜好と子どもの体力との関連を検討した結果、親の運動嗜好は子どもの体力の強固な関連要因であることを明らかにし、子どもの運動・スポーツ参加が親の意思に依存する実状を考えると、親の運動嗜好が子どもの体力に長期的に影響することが予想されると報告されている⁸⁾。また、長野ら⁸⁾は、親の運動嗜好が高いと、子どもが低体力である確率は極めて低かったと報告している。さらに、母親の運動嗜好の低さが子どもの低体力と関連していることを明らかとしている。

これまでの関連研究においては、子どものスポーツに対する感情は、親の行動によって決まり、さらに、子どもの体力についても親の影響が強いことが明らかになっているが、これらの研究においては、どのような親の行動が子どものスポーツに対する感情と関連するのかについて具体的に示されておらず、さらに、調査地域が限局的な研究であり、全国規模のサンプルを使用した研究はほとんど認められない。

そこで、本研究では、2017年に笹川スポーツ財団によって実施された4～11歳のスポーツライフに関する調査2017のデータを2次利用し、子どものスポーツ好悪と子ども・親のスポーツ行動との関連を明らかにすることを目的とした。

【方法】

1. 対象者

本研究は、2017年に笹川スポーツ財団によって実施された4～11歳のスポーツライフに関する調査2017のデータを使用した。この調査は、わが国の子どもの運動・スポーツ活動の現状や問題点を明らかにすることを目的として2年毎の継続的な調査として実施されている調査である。2001年から10歳代を対象に開始し、2009年からは4～9歳も対象とした全国調査になり、2017年から対象年齢を拡大し、4～11歳(未就学児・小学生)を対象とした調査を実施している。調査対象は、全国市区町村に在住する4～11歳を母集団として、層化二段無作為抽出法により抽出された4歳～11歳の2,400名であり、地点数は、市部204地点、町村部21地点、計225地点であった。調査内容は、本人対象として、①運動・スポーツの実施状況、②運動・スポーツ施設、③スポーツ

クラブ、④運動・スポーツへの態度、⑤スポーツ観戦、⑥好きなスポーツ選手、⑦習い事および⑧個人属性、保護者対象として、①運動・スポーツの実施状況、②運動・スポーツ、運動あそびに対する意識や態度、③子どもの生活習慣および④個人属性であった。本研究では、2017年の調査に協力した1,571名を対象者とした。

また、本研究は、笹川スポーツ財団から完全に匿名化されたデータの提供を受けて行った。研究の実施に当たっては、大東文化大学ヒトを対象とする医学系研究に関する倫理審査委員会において承認を得た（通知番号 DHR20-009）。

2. 調査項目

1) 従属変数：子どものスポーツ行動及び親のスポーツ行動

本研究では、①子どものスポーツ行動と②親のスポーツ行動を従属変数とした。まず、①子どものスポーツ行動については、スポーツライフに関する調査2017における調査項目からこれらに対応する項目として、「スポーツを直接観戦したことがある」「テレビでスポーツ観戦する」「スポーツクラブに加入している」を用いた。

「スポーツを直接観戦したことがある」に関する設問は、「あなたは、この1年間に直接スタジアムや体育館などに行ってスポーツの試合をみたことがありますか？」の問いに対して、「設定されたスポーツ種目を選択」か「直接みたことはない」に回答する形式であった。本研究では、何れかのスポーツ種目を選択した者を「直接見たことがある」、直接みたことはないを選択した者を「直接見たことがない」と定義した。

「テレビでスポーツ観戦する」に関する設問は、「あなたは、普段テレビでスポーツの試合をみえますか？」の問いに対して、「1 よくみている」「2 時々みている」「3 ほとんどみていない」「4 まったくいていない」で回答する形式であった。本研究では、「1 よくみている」「2 時々みている」と回答した者を「テレビで見る」、「3 ほとんどみていない」「4 まったくいていない」と回答したものを「テレビで見ない」と定義した。

「スポーツクラブに加入している」に関する設問は、「あなたは、今、学校の運動部やサークル、民間のスポーツクラブ（スイミングクラブや体操クラブなど）、地域のスポーツクラブ（スポーツ少年団や地域のスポーツ教室など）に入っていますか？」の問いに対して、「1 学校のクラブ活動・運動部活動」「2 民間のスポーツクラブ」「3 地域のスポーツクラブ」「4 その他」「5 運動部・クラブなどに入っていない」で回答する形式であった。本研究では、「1 学校のクラブ活動・運動部活動」「2 民間のスポーツクラブ」「3 地域のスポーツクラブ」「4 その他」と回答した者を「加入している」、「5 運動部・クラブなどに入っていない」と回答した者を「加入していない」と定義した。

次に、②親のスポーツ行動として、スポーツライフに関する調査2017における調査項目からこれらに対応する項目として、「家族で運動をする」「親が子どもと運動することが好き」「親がスポーツをすることが得意」を用いた。

「家族で運動をする」に関する設問は、「調査をお願いしたお子様は、あなた自身を含めご家族と、普段、運動・スポーツ、運動あそびをしていますか？」の問いに対して、「1 よくしている」「2 時々している」「3 ほとんどしていない」「4 まったくしていない」で回答する形式であった。本研究では、「1 よくしている」「2 時々している」と回答した者を「家族で運動する」、「3 ほとんどしていない」「4 まったくしていない」と回答した者を「家族で運動はしない」と定義した。

「親が子どもと運動することが好き」に関する設問は、「あなたは、お子様と一緒にからだを動かして遊んだり、運動・スポーツをしたりすることは好きですか？」の問いに対して、「1 好き」「2 どちらかというとき好き」「3 どちらかというとき嫌い」「4 きらい」で回答する形式であった。本研究では、「1 好き」「2 どちらかというとき好き」と回答した者を「親が子どもと運動することが好き」、「3 どちらかというとき嫌い」「4 きらい」と回答した者を「親が子どもと運動することが嫌い」と定義した。

「親がスポーツをすることが得意」に関する設問は、「あなたご自身は、運動・スポーツをすることは得意ですか？」の問いに対して、「1 得意」「2 どちらかというとき得意」「3 どちらかというとき不得意」「4 不得意」で回答する形式であった。本研究では、「1 得意」「2 どちらかというとき得意」と回答した者を「親がスポーツをすることが得意」、「3 どちらかというとき不得意」「4 不得意」と回答した者を「親がスポーツをすることが不得意」と定義した。

最後に、①子どものスポーツ行動及び②親のスポーツ行動がアクティブであるか、非アクティブであるかについて、本研究では、①子どものスポーツ行動について、「スポーツを直接観戦したことがある」「テレビでスポーツ観戦する」「スポーツクラブに加入している」の3項目について、それぞれ、「直接見たことがある＝0点、直接みたことはない＝1点」、「テレビで見る＝0点、テレビで見ない＝1点」、「加入している＝0点、加入していない＝1点」を与え、合計得点を算出し（得点範囲：0-3点）、全体の中央値（2点）で、子どものスポーツ行動がアクティブ群（1点以下）と非アクティブ群（2点以上）の2群に分類した。②親のスポーツ行動について、「家族で運動をする」「親が子どもと運動することが好き」「親がスポーツをすることが得意」の3項目について、それぞれ、「家族で運動する＝0、家族で運動はしない＝1」、「親が子どもと運動することが好き＝0、親が子どもと運動することが嫌い＝1」、「親がスポーツをすることが得意＝0、親がスポーツをすることが不得意＝1」を与え、合計得点を算出し（得点範囲：0-3点）、全体の中央値（1点）で、親のスポーツ行動がアクティブ群（0点）と非アクティブ群（1点以上）の2群に分類した。これらの分類は、「子ども・親のスポーツ行動」と命名した。

2) 独立変数：子どものスポーツに対する好悪

子どものスポーツに対する好悪に関する設問は、「あなたは、運動やスポーツ、運動あそびをするのは好きですか？」の問いに対して、「1 好き」「2 どちらかというとき好き」「3 どちらかというとき嫌い」「4 きらい」で回答する形式であった。本研究では、「1 好き」「2 どちらかというとき好き」と回答した者を「スポーツが好き」、「3 どちらかというとき嫌い」「4 きらい」と回答

した者を「スポーツが嫌い」と定義した。

3) 共変量：その他の変数

子どもが通う学校区分については、小学校、幼稚園、保育園、その他、在学・在園していない、の5群に分類した。学年については、年少・中・長、小学校1年生から6年生までの9群に分類した。居住都市規模については、東京都区部、20大都市、人口10万以上の市、人口10万人未満の市、町村の5群に分類した。世帯年収については、200万円未満、200万円～1,000万まで100万円万きざみ、1,000万円以上の11群に分類した。

3. 統計的手法

子どものスポーツに対する好悪と子ども・親のスポーツ行動、子どものスポーツ行動の構成要素である3項目及び親のスポーツ行動の構成要素である3項目のそれぞれとの関連を検討するため、単変量解析として χ^2 検定にて検討し、さらに共変量を調整した上で検討するため、ロジスティック回帰分析を用いてオッズ比(OR)と95%信頼区間(CI)をそれぞれ算出した。年齢のみを調整した年齢調整モデル、年齢、学年、居住都市規模で調整した多変量調整モデルの2モデルにて検討した。

統計処理には、jamovi version 1.2.27 (<https://www.jamovi.org>)を用いて行い、p値が0.05未満を統計学的有意とした。

【結果】

Table1に、対象者の基本属性を子どものスポーツ好き・嫌い別に示した。平均年齢については、スポーツ好きが 8.1 ± 2.32 歳、スポーツ嫌いが 8.6 ± 2.25 であり、有意な差がみられた($p = .023$)。学校区分、学年、世帯年収については、 χ^2 検定の結果、有意な差はみられなかったが、居住都市規模のみ有意であった($p = .009$)。

Table2に、子どものスポーツ好悪と子どものスポーツ行動、子どものスポーツ観戦、子どものテレビでのスポーツ観戦、子どものスポーツクラブ加入、親のスポーツ行動、親の家族で運動、親が子どもと運動することの好悪、親自身がスポーツをすることが得意との単変量解析の結果を示した。子どもがスポーツ好きである群は、スポーツが嫌いな群と比較して、子どものスポーツ行動がアクティブである割合が高く($p < .001$)、スポーツを直接観戦した事がある割合が高く($p = .003$)、テレビでスポーツを見る割合が高く($p < .001$)、スポーツクラブに加入している割合が高かった($p < .001$)。さらに、子どもがスポーツ好きである群は、スポーツが嫌いな群と比較して、親のスポーツ行動がアクティブである割合が高く($p < .001$)、家族で運動する割合が高く($p < .001$)、親が子どもと運動することが好きである割合が高く($p < .001$)、親自身がスポーツをすることが得意である割合が高かった($p < .001$)。

Table1 対象者の基本属性 (n=1,571)

	n(人)	スポーツ好き		スポーツ嫌い		p
		n(人)	%	n(人)	%	
年齢	1,571	8.1±2.32		8.6±2.25		0.023
性別						
男		767	54.9%	70	40.5%	<.001
女	1,571	631	45.1%	103	59.5%	
学校区分						
小学校		1,106	79.2%	147	85.0%	0.334
幼稚園		147	10.5%	16	9.2%	
保育園	1,570	133	9.5%	9	5.2%	
その他		7	0.5%	1	60.0%	
在学・在園していない		4	0.3%	0	0.0%	
学年						
年少(3歳児クラス)		1	0.1%	0	0.0%	0.617
年中(4歳児クラス)		142	10.2%	13	7.6%	
年長(5歳児クラス)		137	9.9%	12	7.0%	
1年生		156	11.2%	15	8.7%	
2年生	1,558	137	9.9%	15	8.7%	
3年生		185	1330.0%	24	14.0%	
4年生		181	13.1%	27	15.7%	
5年生		198	1430.0%	28	16.3%	
6年生		250	18.0%	38	22.1%	
居住都市規模						
東京都区部		65	4.6%	6	3.5%	0.009
20大都市		248	17.7%	41	23.7%	
人口10万人以上の市	1,571	633	45.3%	55	31.8%	
人口10万人未満の市		324	23.2%	50	28.9%	
町村		128	9.2%	21	12.1%	
世帯年収						
200万円未満		54	5.0%	7	5.2%	0.343
200~300万円未満		57	5.3%	14	10.4%	
300~400万円未満		136	12.7%	16	11.9%	
400~500万円未満		108	10.1%	19	14.2%	
500~600万円未満		170	15.9%	21	15.7%	
600~700万円未満	1,206	103	9.6%	12	9.0%	
700~800万円未満		77	7.2%	5	3.7%	
800~900万円未満		55	5.1%	4	3.0%	
900~1,000万円未満		36	3.4%	3	2.2%	
1,000万円以上		57	5.3%	6	4.5%	
わからない		219	20.4%	27	20.1%	

*p値の算出において、カテゴリー変数は χ^2 検定、連続変数はt検定を使用した

*各アイテムの総数に欠損値は含まれていない

Table2 子どものスポーツ好悪と子ども・親のスポーツ行動との関連：単変量解析の結果

	n(人)	スポーツ好き		スポーツ嫌い		p
		n(人)	%	n(人)	%	
子どものスポーツ行動	アクティブ	648	47.9%	27	17.0%	P<.001
	非アクティブ	808	52.1%	132	83.0%	
スポーツ直接観戦	あり	475	31.7%	35	20.5%	p=0.003
	なし	1,084	68.3%	136	79.5%	
テレビでのスポーツ観戦	見る	725	49.2%	37	21.5%	p<.001
	見ない	844	50.8%	135	78.5%	
スポーツクラブ加入	している	909	61.3%	60	34.9%	p<.001
	していない	647	38.7%	112	65.1%	
親のスポーツ行動	アクティブ	539	36.3%	33	19.1%	p<.001
	非アクティブ	1,027	63.7%	140	80.9%	
家族で運動	する	936	62.2%	68	39.3%	p<.001
	しない	632	37.8%	105	60.7%	
親が子どもと運動すること	好き	1,157	76.3%	92	53.2%	p<.001
	嫌い	411	23.7%	81	46.8%	
親がスポーツが得意	得意	792	52.3%	63	36.4%	p<.001
	不得意	775	47.7%	110	63.6%	

* p値の算出には χ^2 検定を使用した

* 各アイテムの総数に欠損値は含まれていない

Table3 子どものスポーツ好悪と子どものスポーツ行動との関連：ロジスティック回帰分析の結果

	年齢調整モデル				多変量解析モデル			
	スポーツ好悪	オッズ比	95%信頼区間	p	オッズ比	95%信頼区間	p	
スポーツ直接観戦をしたことがある	嫌い	1.00			1.00			
	好き	1.92	1.30	2.84	0.001	1.98	1.33	2.93
テレビでスポーツ観戦する	嫌い	1.00			1.00			
	好き	4.35	2.94	6.43	<.001	4.58	3.09	6.78
スポーツクラブに加入している	嫌い	1.00			1.00			
	好き	3.44	2.44	4.83	<.001	3.36	2.38	4.75
家族で運動をする	嫌い	1.00			1.00			
	好き	2.45	1.77	3.40	<.001	2.53	1.81	3.53
親が子どもと運動することが好き	嫌い	1.00			1.00			
	好き	2.81	2.03	3.89	<.001	2.89	2.08	4.03
親がスポーツをすることが得意	嫌い	1.00			1.00			
	好き	1.94	1.39	2.69	<.001	1.95	1.40	2.71

*年齢調整モデル：年齢のみで調整

*多変量調整モデル：年齢，学年，居住都市規模にて調整

Table3 に、子どものスポーツ好悪と子どものスポーツ観戦、子どものテレビでのスポーツ観戦、子どものスポーツクラブ加入、親の家族で運動、親が子どもと運動することの好悪、親自身がスポーツをすることが得意との関連を、それぞれロジスティック回帰分析を用いて検討した結果を示した。年齢調整モデルにおいて、子どもがスポーツを好きである群は、スポーツが嫌いである群と比較して、子どもがスポーツを直接観戦した事がある割合は 1.92 倍 (OR : 1.92, CI : 1.30-2.84, $p < .001$)、子どもがテレビでスポーツを観戦する割合は 4.35 倍 (OR : 4.35, CI : 2.94-6.43, $p < .001$)、子どもがスポーツクラブに加入している割合は 3.44 倍 (OR : 3.44, CI : 2.44-4.83, $p < .001$) であった。さらに、子どもがスポーツを好きである群は、スポーツが嫌いである群と比較して、親が家族で運動する割合は 2.45 倍 (OR : 2.45, CI : 1.77-3.40, $p < .001$)、親が子どもと運動をすることが好きである割合は 2.81 倍 (OR : 2.81, CI : 2.03-3.89, $p < .001$)、親自身がスポーツをすることが得意である割合は 1.94 倍 (OR : 1.94, CI : 1.39-2.69, $p < .001$) であった。また、年齢、学年、居住都市規模にて調整した多変量解析モデルにおいても、子どもがスポーツを好きである群は、スポーツが嫌いである群と比較して、子どもがスポーツを直接観戦した事がある割合は 1.98 倍 (OR : 1.98, CI : 1.33-2.93, $p < .001$)、子どもがテレビでスポーツを観戦する割合は 4.58 倍 (OR : 4.58, CI : 3.09-6.78, $p < .001$)、子どもがスポーツクラブに加入している割合は 3.36 倍 (OR : 3.36, CI : 2.38-4.75, $p < .001$) であった。さらに、子どもがスポーツを好きである群は、スポーツが嫌いである群と比較して、親が家族で運動する割合は 2.53 倍 (OR : 2.53, CI : 1.81-3.53, $p < .001$)、親が子どもと運動をすることが好きである割合は 2.89 倍 (OR : 2.89, CI : 2.08-4.03, $p < .001$)、親自身がスポーツをすることが得意である割合は 1.95 倍 (OR : 1.95, CI : 1.40-2.71, $p < .001$) であった。

子どものスポーツ好悪と子ども及び親のスポーツ行動との関連を、ロジスティック回帰分析も用いて検討した結果を Table4 に示した。年齢調整モデルにおいて、子どもがスポーツを好きである群は、スポーツが嫌いである群と比較して、子どものスポーツ行動がアクティブである割合は 6.61 倍 (OR : 6.61, CI : 1.11-2.66, $p < .001$) であり、親のスポーツ行動がアクティブである割合は 2.39 倍 (OR : 2.39, CI : 1.61-3.55, $p < .001$) であった。年齢、学年、居住中都市規模にて調整した多変量解析モデルにおいても、子どもがスポーツを好きである群は、スポーツが嫌いである群と比較して、子どものスポーツ行動がアクティブである割合は 6.56 倍 (OR : 6.56, CI : 1.11-2.66, $p < .001$) であり、親のスポーツ行動がアクティブである割合は 2.42 倍 (OR : 2.42, CI : 1.63-3.61, $p < .001$) であった。

Table4 子どものスポーツ好悪と子どものスポーツ行動との関連：ロジスティック回帰分析の結果

	年齢調整モデル			多変量解析モデル				
	スポーツ好悪	オッズ比	95%信頼区間	p	オッズ比	95%信頼区間	p	
子どものスポーツ行動がアクティブ	嫌い	1.00			1.00			
	好き	6.61	1.11	2.66	<.001	6.56	1.11	2.66
親のスポーツ行動がアクティブ	嫌い	1.00			1.00			
	好き	2.39	1.608	3.554	<.001	2.42	1.626	3.61

*年齢調整モデル：年齢のみで調整

*多変量調整モデル：年齢，学年，居住都市規模にて調整

【考察】

本研究では、2017年に笹川スポーツ財団によって実施された4～11歳のスポーツライフに関する調査2017のデータを2次利用し、子どものスポーツ好悪と子ども・親のスポーツ行動との関連について検討した。その結果、スポーツが好きな子どもは、スポーツが嫌いな子どもと比較して、子ども自身及び親のスポーツ行動がアクティブである割合が高かった。また、アクティブな行動を構成する要件別にみても、スポーツが好きな子どもは、スポーツが嫌いな子どもと比較して、「スポーツを直接観戦した事がある」、「テレビでスポーツを観戦する」、「スポーツクラブに加入している」の割合が有意に高かった。さらに、スポーツが好きな子どもの親は、スポーツが嫌いな子どもの親と比較して、「親が家族で運動する」、「親が子どもと運動をすることが好きである」、「親自身がスポーツをすることが得意である」の割合が有意に高かった。このことから、子ども自身のスポーツ活動及び親のスポーツ行動をアクティブにすることは、子どもにスポーツに対するポジティブな認識を持たせることに有用である可能性が示唆された。

子どものスポーツや身体活動に関する先行研究はいくつか報告されている。文部科学省の調査によると、家の人と一緒にスポーツを「する」のみならず、「(テレビを含め)観戦する」、運動やスポーツについて「話をする」頻度が高いほど、子どもの運動時間が長く、体力得点も高いことが報告されており⁹⁾、子どもと全く遊ばない保護者をもつ子どもは体力・運動能力が低く¹⁰⁾、子どもがスポーツに参加するか否かと両親の身体活動の高さとの関連性¹¹⁾や親の身体活動のサポートと親の運動習慣は、子どもの習慣的な身体活動の予測因子となることが示されている¹²⁾。さらに、塩野谷ら⁶⁾は、親の運動に対する自己効力感が高いこと、親自身の身体活動好意度が高いこと、親が子どもの身体活動を重要だと認識していることが、子どもの身体活動推進に影響する親の態度であることを明らかにしている。また、子どもの活発な身体活動は、保護者の経済的地位、子どものスポーツ活動に対する保護者のサポート、保護者自身のスポーツ活動、スポーツは性格形成や社会性の発達に貢献すると考える保護者の信念は、子どもの活発な身体活動レベルを大幅に予測すると報告されている¹³⁾。これらのように、親のスポーツに対する考え方が子どものスポーツに与える影響は多大であるといえ、本研究の結果は先行研究を支持する結果であった。

一方、運動・スポーツに対する得意・不得意の問いに対しては、学年が低いほど得意と答える割合が高いという報告があり¹⁴⁾、また中野ら¹⁵⁾は、低学年児童において、保護者の運動指向性によって体力・運動能力に有意な違いは確認されず、低学年児童では、保護者の運動指向性が身体活動の規定要因にならないことを示唆し、さらに、大坪ら¹⁶⁾は、女子児童を対象とした研究ではあるが、運動・スポーツに対して嫌悪感が増大するのは、小学校中学年から高まりはじめることを示しているが、本研究の解析においては、対象者の年齢及び学年を考慮した上で検討してはいるものの、低学年児童と高学年児童との違いにまで言及することは出来なかった。

なぜ、スポーツ好きな子どもが子ども自身及び親のスポーツ行動がアクティブであることと正の

関連が認められたかについて、その要因の一つに子どもの運動有能感があげられる。岡澤^{17) 18)}は、運動・スポーツに対する好き嫌いに関して、運動嫌いの原因が、運動有能感の欠如であることを指摘し、運動有能感は加齢に伴って減少傾向がみられ、運動有能感の欠如が運動嫌いを形成していると報告している。子ども自身が常にスポーツに触れる環境にあることや、親子でのスポーツ活動を通じて運動有能感が育まれることから、子どもはスポーツが好きになると考えられる。

本研究の意義は、近年問題視されている身体活動の低下や運動不足による子どもの健康障害への対策に対して、子どものスポーツ好悪に対する親と子どものスポーツ行動について明らかにしたことで、今後の子どもの身体活動の低下や運動不足解消に関する知見を得たことである。さらに、国民の代表サンプルに近い大きな集団を対象としたことにより、わが国の子どもにおける健康増進・身体活動推進対策に有益と考えられる。また、子どもの生活リズムは、保護者の生活習慣と互いに影響し合いながら確立する¹⁹⁾ことが明らかになっていることから、スポーツの好悪のみならず、子どもが健康生活を送る上で保護者の生活習慣を整えることも併せて重要であると考えられる。

本研究の強みとして、笹川スポーツ財団によって実施された4～11歳のスポーツライフに関する調査2017のデータを用いた点である。本研究の結果は、わが国を代表するサンプルを用いた結果であり、一般化可能性が高い結果であると言える。さらに、子ども及び親のスポーツ行動について、多面的な指標から捉えて評価した点もあげられる。

一方、本研究の限界として、本研究は横断研究であるため、因果関係について言及できないことがあげられる。スポーツが好きなお子様であるからスポーツ行動がアクティブであるのか、逆にスポーツ行動がアクティブであるからスポーツが好きなのかについて明言することは出来ない。二点目として、先行研究^{14) 15) 16)}において、子どものスポーツに対する認識は低学年児童の方がポジティブであると報告されているため、年齢や学年で層化したデータによる検討が必要であったとも考えられるが、本研究では、年齢、学年を考慮した統計解析を行うにとどまった点である。

本研究の結論として、スポーツが好きなお子様は、スポーツが嫌いなお子様と比較して、子ども自身及び親のスポーツ行動がアクティブである割合が高かった。この結果は、近年問題視されている身体活動の低下や運動不足による子どもの健康障害への対策に対する知見を得たものであり、子どものスポーツに対する認識をポジティブにするためには、子どもや親の日頃のスポーツ行動をアクティブにすることが重要であることが示唆された。

【結論】

本研究の結論として、スポーツが好きなお子様は、スポーツが嫌いなお子様と比較して、子ども自身及び親のスポーツ行動がアクティブである割合が高かった。この結果は、近年問題視されている身体活動の低下や運動不足による子どもの健康障害への対策に対する知見を得たものであり、子どものスポーツに対する認識をポジティブにするためには、子どもや親の日頃のスポーツ行動をアクティブにすることが重要であることが示唆された。

【引用文献】

- 1) スポーツ庁: 令和元年度全国体力・運動能力、運動週間等調査結果, https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/toukei/kodomo/zencyo/1411922_00001.html, 2021年6月2日閲覧
- 2) Therese Lockenwitz Petersen, Liselotte Bang Møller, Jan Christian Brønd, Randi Jepsen and Anders Grøntved: Association between parent and child physical activity: a systematic review, *International Journal of Behavioral Nutrition and Physical Activity*, 17, 1, 2020
- 3) Jodie A. Stearns, Ryan Rhodes, Geoff D. C. Ball, Normand Boule, Paul J. Veugelers, Nicoleta Cutumisu and John C. Spence: A cross-sectional study of the relationship between parents' and children's physical activity, *BMC Public Health*, 16, 1, 1-11, 2016
- 4) 佐々木卓代: 子どもの習い事を媒介とする父親の子育て参加と子どもの自己受容感: スイミングスクールを対象とした調査から, *家族社会学研究*, 第21号, (1), 65-77, 2009
- 5) 久崎孝浩, 石山貴章: スポーツに参加する子どもの心理的発達に及ぼす大人の影響: その研究動向と今後の方向性, *応用障害心理学研究*, 第11号, 45-67, 2012
- 6) 塩野谷祐子: 幼児の身体活動に関する親の態度に影響する要因についての検討, *和洋女子大学紀要*, 第56集, 75-84, 2016
- 7) 馬場宏輝, 石山信夫: 保護者の運動・スポーツ実践と意識が子どもの体力向上に与える影響に関する研究: 宮城県T小学校体力検定結果を踏まえて, *仙台大学紀要*, 第40号, (1), 97-110, 2008
- 8) 長野真弓, 足立稔: 親の運動嗜好と子どもの体力との関連性の検討, *発育発達研究*, 第78号, 24-34, 2018
- 9) 文部科学省スポーツ基本計画(2017年), http://www.mext.go.jp/prev_sports/comp/a_menu/sports/micro_detail/_ic-sFiles/afieldfile/2017/03/23/1383656_002.pdf, 2021年6月2日閲覧
- 10) 香村玲奈, 春日昇章, 福富恵介: 幼児の体力、運動能力と保護者の遊びや運動に関する養育態度との関連, *岐阜大学教育学部研究報告(自然科学)*, 第35巻, 147-151, 2011
- 11) Rodrigues D, Padez C, Machado-Rodrigues A: Child participation in sports is influenced by patterns of lifestyle-related behaviors, *American Journal of Human Biology*, 30, (6), 2018
- 12) 上地広昭, 中村奈々子, 竹中晃二, 鈴木秀樹: 子どもにおける身体活動の決定要因に関する研究, *健康心理学研究*, 15, (2), 29-38, 2002
- 13) Michael Mutz, Peggy Albrecht: Parents' Social Status and Children's Daily Physical Activity: The Role of Familial Socialization and Support, *Journal of Child and Family Studies*, 26, 3026-3035, 2017
- 14) 中野貴博: 運動の得意苦手, 好き嫌いによる楽しさを感じる瞬間の違い: 運動があまり得意でない児童の心理特性, *子どもと発育発達*, 16, (1), 49-53, 2018
- 15) 中野貴博, 四方田健二, 坂井智明, 沖村多賀典: 保護者の運動指向性は子ども達の活動意欲や体力に影響をおよぼすのか: 運動実践中の子ども達の体力・活動量変化による検討, *名古屋学院大学論集 医学・健康科学・スポーツ科学篇*, 第8巻, 第1号, 9-18, 2019
- 16) 大坪健太, 春日晃章, 濱口あずさ, 古田真太郎, 南輝良々: 女子児童・生徒の運動・スポーツ及び体育授業に対する嫌悪感の加齢変化, *教育医学*, 第65巻, 第3号, 221-216, 2020
- 17) 岡澤祥訓: 運動好きと自己有能感, *体育の科学*, 53, (12), 905-909, 2003
- 18) 岡澤祥訓, 北真佐美, 諏訪祐一郎: 運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究, *スポーツ教育学研究*, 16, (2), 145-155, 1996
- 19) 吉川昌子: 幼児をもつ父親と母親の養育態度と育児不安との関連, *中村学園研究紀要*, 35, 47-53, 2003